

#### 4. 看護協会との提携による「神戸市看護大学まちの保健室」

##### 1) 「神戸市看護大学まちの保健室」の構成と実施体制

「神戸市看護大学まちの保健室」（以下、まちの保健室）は、現代 GP 採択に先立つ平成 17 年から、兵庫県看護協会西部支部との協賛の下、本学が中心となって取り組んできた活動である。当初は健康維持・増進を考えている地域住民一般を対象とした「まちの保健室活動」から開始したが、学園都市という地域住民の健康ニーズを考慮し、子どもと親を対象にした「子育て支援活動」（平成 18 年 4 月から）、健康障害やさまざまなストレスにより精神的に悩みや障害をもつ方を対象にした「こころと身体の看護相談」（平成 19 年 4 月から）が追加され、最終的には 3 本立ての活動構成となった（図 II-4-1）。各活動の企画や運営は、「子育て支援活動」については小児看護学分野、「こころと身体の看護相談」については精神看護学分野の専門教員が担い、「まちの保健室活動」は成人看護学分野、老年看護学分野、基礎看護学分野、地域看護学分野と基礎科目・専門基礎科目分野の教員が協力して担当してきた。また、この企画・運営・評価は、全領域の代表メンバーで構成される運営委員会と現代 GP 事務局がおこない、運営委員会は、おおむね月 1 回開催されてきた。

以下では、「まちの保健室活動」「子育て支援活動」「こころと身体の看護相談」のそれぞれについて取り組みの実際を報告する。

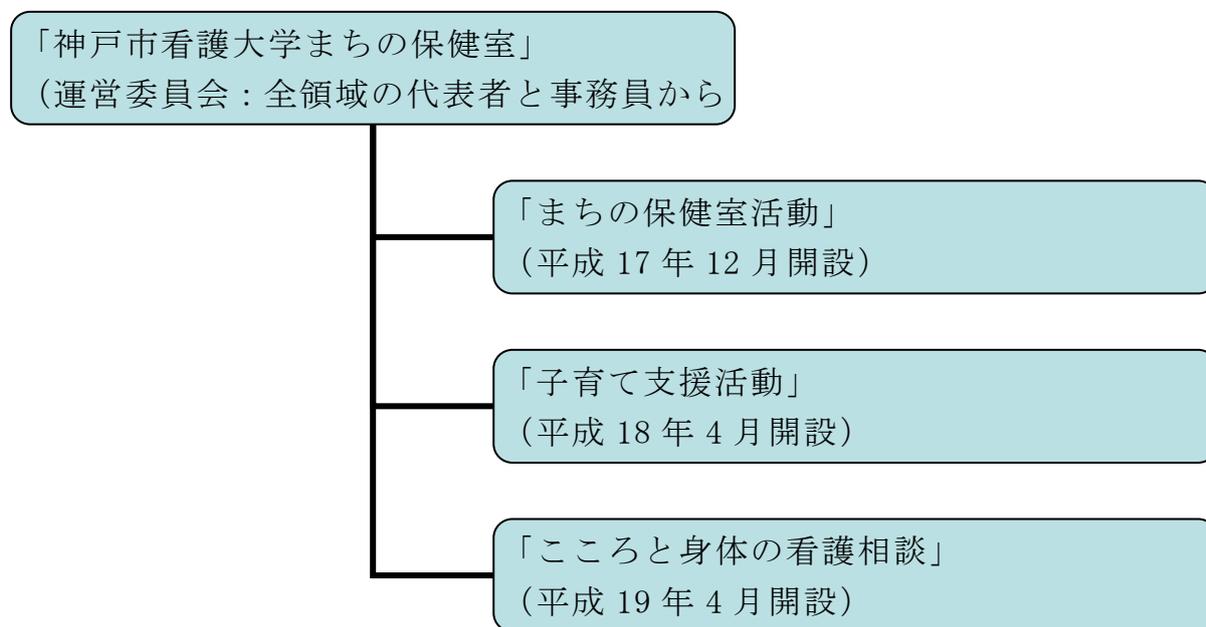


図 II-4-1 神戸市看護大学まちの保健室実施体制

## 2) 「まちの保健室活動」の実績と成果

### (1) 「まちの保健室活動」の実績

「まちの保健室活動」は、平成 18 年度には実施月の第 2 木曜日 14 時から 16 時に開催、平成 19 年度からは準備や授業時間との関連で第 2 木曜日の 15 時から 17 時の開催となった。各年度の開催日、テーマ等の活動実績は次の表Ⅱ-4-1～表Ⅱ-4-3 に示すとおりであった。

表Ⅱ-4-1 平成 18 年度「まちの保健室活動」の実績

開催日	場所	参加者(名)			テーマ	内容
		住民	教員	学生		
10月12日(木)	学園東町 地域福祉 センター	34	7	4	『健康づくり～ 食事と靴選び～』	高血圧と靴選びのミニ講座、血圧測定と SAT システムの体験
11月9日(木)	看護大学 西館	20	12	4	『骨の話』	ミニ講座「骨の話」、SAT (食育) システムの体験、身長体重、体脂肪率、健康相談
11月11日(土)	看護大学 学生会館	74	6	4	『美しい歩き方 と健康ウォーキング』 【外部講師】	ウォーキングの注意事項の講義を受けながら、10人ずつ整列して何回も歩く。他のグループの歩き方を見て、自分自身の姿勢や歩き方を振り返る。講習前後の歩く姿をビデオ撮影して全員で鑑賞
12月14日(木)	看護大学 体育館・西館	35	12	2	『介護予防にむ けて～あなたの 体力とからだの ゆがみ大丈夫で すか?～』 【外部講師】	血圧測定、開眼・閉眼片足立ち、上体越し、握力、身長体重、体脂肪率、長座体前屈、10m 歩行、ファンクショナルリーチ、最大下 1 歩幅、脚筋力、骨測定、講義「体のゆがみについて」
2月8日(木)	看護大学 実習室	17	10	5	『あなたにもで きる心肺蘇生法 と AED』	講義「あなたにもできる心肺蘇生法と AED」、AED の器械操作、血圧測定、骨測定、身長体重、体脂肪率、健康相談
3月8日(木)	看護大学 西館	24	10	5	『ストップ・ザ・ 高脂血症』	身体や危険因子のチェック、SAT システム体験、10 分間歩行の運動量チェック、骨測定、グループ討議後、自分の目標設定

(平成 18 年度：参加者数・204 名、教員ボランティア・57 名、学生ボランティア・24 名)

表Ⅱ-4-2 平成19年度「まちの保健室活動」の実績

開催日	場所	参加者(名)			テーマ	内容
		住民	教員	学生		
4月12日(木)	看護大学 学生会館	21	10	0	『こころとからだのリラクゼーション』	身体計測、ミニ講座「こころとからだのリラクゼーション」、ストレスチェック、簡単な体操、ストレス測定、健康相談
5月10日(木)	看護大学 体育館・西館	14	9	0	『身体のバランスを取ろう』 【外部講師】	血圧測定、骨強度測定、脚筋力、身長、体重、体脂肪、握力、長座体前屈、10メートル歩行、ファンクショナルリーチ、最大下1歩幅、ミニ講座「身体のバランスを取ろう」
6月14日(木)	看護大学 西館	38	11	2	『認知症の理解と予防』	講座『認知症の理解と予防』、個別相談
7月12日(木)	看護大学 西館	28	7	2	『楽しく体験ウォーキングとフットケア』	○×式クイズと講義、正しい歩き方の体験コーナー、指間力チェックと足指運動
9月20日(木)	看護大学 西館	9	7	2	『生活習慣病について』 【外部講師】	講演『生活習慣病について』 質疑応答
10月11日(木)	伊川谷 ながさかえん	37	9	3	『出前まちの保健室 in ながさかえん』	身体計測、健康相談
11月3日(土)	看護大学 西館	42	5	25	あざみ祭特別企画『アロマセラピーと健康』 【外部講師】	『アロマセラピーと健康』ミニ講座、エゴグラムと香の調査、アロマセラピーの実際
11月8日(木)	看護大学 学生会館	6	8	0	『基本的体力測定』 【外部講師】	血圧測定、骨強度測定、脚筋力、身長、体重、体脂肪、握力、長座体前屈、10メートル歩行、ファンクショナルリーチ、最大下1歩幅、ミニ講座『身体のバランスを取ろう』
12月13日(木)	看護大学 南館	7	9	3	『ノロ・インフルエンザの予防』	インフルエンザ予防について、健康相談
2月14日(木)	看護大学 カフェテリア	3	5	1	『集中健康相談』	健康相談
3月13日(木)	西神南 セリオ ホール	51	9	6	『出前まちの保健室 in セリオ』	血圧測定、体脂肪測定、骨測定、健康相談、アロママッサージ

(平成19年度：参加者数・256名、教員ボランティア・89名、学生ボランティア・44名)

表Ⅱ-4-3 平成20年度「まちの保健室活動」の実績（11月末までの実績）

開催日	場所	参加者（名）			テーマ	内 容
		住 民	教 員	学 生		
4月10日(木)	看護大学 学生会館	15	7	13	『アロマセラピーと健康』	ミニ講座「アロマセラピーと健康」、「生活に生かすアロマ」、看護学生によるアロマを用いたハンドマッサージ
5月15日(木)	看護大学 西館	72	6	2	『骨のはなし』 【外部講師】	講座「骨のはなし」、骨量測定
6月12日(木)	西神南 セリオ ホール	53	6	0	『高齢者とうつ』	講義『高齢者とうつ』 懇談会『海外の健康事情』
7月10日(木)	看護大学 カフェテリア	21	10	13	『カラーセラピー&健康相談』 【外部講師】	講座『カラーセラピー入門』、学生ボランティアによる『カラーセラピー&健康相談』、健康相談
9月11日(木)	看護大学 西館	21	4	2	『歯科えらびと歯の健康～歯周病は恐くない』 【外部講師】	講義『歯科えらびと歯の健康』～ 歯周病は恐くない～、質疑応答
10月9日(木)	看護大学 学生会館	22	8	4	学生ボランティアによる『笑い&健康相談』	講義『笑いの感染源になろう!』、 笑いの準備体操、自分らしいユーモアの発見、健康相談
11月8日(土)	看護大学 西館	44	3	8	あざみ祭特別企画『元気になるメイクレッスン』 【外部講師】	かづきれいこ（講師）、西奈まるか（講師）によるメイクレッスン、 血流マッサージなど

（平成20年度：参加者数・218名、教員ボランティア・44名、学生ボランティア・42名）

「まちの保健室活動」は、開催日時が平日昼間ということもあってか、当初から参加者は高齢者や女性が多い傾向にあった。こうした対象者の特性に鑑み、取り上げるテーマは血圧や脂肪をコントロールするための食事、体力や健康を維持するための適切な運動、足の健康と靴選びや歯の健康のほか、高齢者に関心が高い認知症予防や骨粗鬆症予防なども企画に加えた。また、疾病予防の観点だけでなく、より健康な状態を目指すという観点からアロマセラピーやカラーセラピー、笑いについてなども取り上げ、参加者の年齢層の拡大を目指した。

活動形式としては、毎回のテーマに沿って、20～30分のミニ講義と健康相談や測定、体験コーナーなどを併せて設けることがほとんどであった。活動の場は基本的に大学としたが、地域の保健師や自治会のメンバーからの要請で、年1～2回は、大学から地域に出向く「出前型まちの保健室」も実施した。

平成 20 年度からは、育児中の主に母親の健康づくりも支援したいとの方針から、4 月、7 月、9 月、11 月の「子育て支援活動」に託児ボランティアを設けたが、7 月に 2 名、11 月のあざみ祭で 8 名の託児依頼のみであった。

活動の企画・実施をすすめる上での事務局の役割は大きかった。まちの保健室における事務局の主な役割には、広報・準備・物品管理・報告書作成がある。広報では各月の教員責任者と相談しながらチラシを作成し、毎月 500 枚以上を印刷し、学園都市東町・西町の自治会の広報予定にあわせて配布した。配布されたチラシは自治会を通じて各世帯に回覧されるほか、集合住宅では掲示板に掲示された。また、学園都市駅近隣の大型スーパー、診療所、スポーツ施設などでも掲示への協力が得られた。

毎回の準備は、教員責任者が担当者と相談しながら、会場レイアウトやタイムスケジュールを作成し全員にメールで伝達。当日の配布物の印刷、会場までの案内板の作成、健康相談が開催される場合は個人ごとに作成しているカルテの準備を分担しておこなった。その他、テーマや時期に応じて、お茶や筆記具なども適宜準備した。これらの準備に要する期間はおよそ半月程度であった。また、当日の運營業務としては、相談、研修等の実施や補助のほか、写真撮影や受付、講師への謝礼渡し等、活動終了後の報告書（様式 9）と参加住民へのアンケートの取りまとめなどが加わった。

このように、毎回の準備から終了まで煩雑で多様な作業が繰り返されたが、教員と事務局との連携の下でおおむね円滑に実施することができた。

第16回 神戸市看護大学  
「まちの保健室」  
文部科学省 現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)

テーマ:  
**認知症の理解と予防**

内容  
~15:00 受付  
15:00~15:45 講義「生活のなかでの認知症予防」  
※認知症の知識、簡単にできる予防行動について  
15:45~16:45 相談  
※物忘れに関して気になることの相談

日時：平成19年6月14日(木)  
場所：神戸市看護大学 西館1階(W12)

<お問い合わせ>  
神戸市看護大学「まちの保健室」  
代表：池田 TEL:794-8080(代表)  
兵庫県看護協会西部支部協賛

神戸市看護大学「まちの保健室」  
文部科学省  
現代的教育ニーズ取組支援プログラム (現代GP)

あざみ祭特別企画  
**『アロマセラピーと健康』**

★ミニ講演「アロマセラピーと健康」  
講師：江川幸二先生(神戸市看護大学 准教授)

★エゴグラムと香りの調査

★アロマセラピーの実際  
実技講師：古谷久美子先生 大泉恵美先生

講師プロフィール(有会社M-C)  
エステティックサロンで10年間利用しながら中級マッサージ、インナーセラピー、ユルユルヨガ、西洋のアロマセラピーを学び、セラピスト及びインストラクターを修得。婦人科クリニックでアロマセラピストとして12年間や、不妊、PMOうつ状態の患者さんのケアに活躍するなど多くの経験がある。

講師プロフィール(有会社I-M-C)  
産業看護師として企業社員のメンタルヘルスや健康管理に従事。

有会社M-C 業務内容  
・企業の健康管理  
・健康講座の企画・実施  
・健康促進のためのプログラム作成とその保健指導  
・健康セミナー開催  
・海外駐在社員の健康管理

内容  
・ミニ講演  
・エゴグラムと香りの調査  
・アロマセラピーの実際  
・エゴグラムと香りの関係の結果発表  
・セルフハンドマッサージの指導

無料

時間・場所は変更される場合があります。ご了承ください。

定員の50名となりましたので  
申込終了させていただきます。  
ご了承ください。

開催日：平成19年11月3日(土)  
開催時間：10:00~12:00頃  
場所：神戸市看護大学 西館1階

<お問い合わせ>  
神戸市看護大学「まちの保健室」  
代表：078-794-8080 (事務局:久保)  
兵庫県看護協会西部支部協賛

資料Ⅱ-4-1 「神戸市看護大学まちの保健室」配布チラシの例

以下では、好評だった「まちの保健室活動」の一例を紹介する。

### ①「認知症の理解と予防」

平成 19 年 6 月 14 日（木）の 15 時から 17 時まで、本学西館 12 号教室にて「認知症予防の理解と予防」のテーマで開催された。まず、本学・高山成子教授が認知症に関する講義をおこなったのち、参加者全員が予防につながる簡単な運動や歌を楽しんだ。終了後には本学教員による個別相談がおこなわれ、6 名の住民から自分や家族のことについての相談があった。

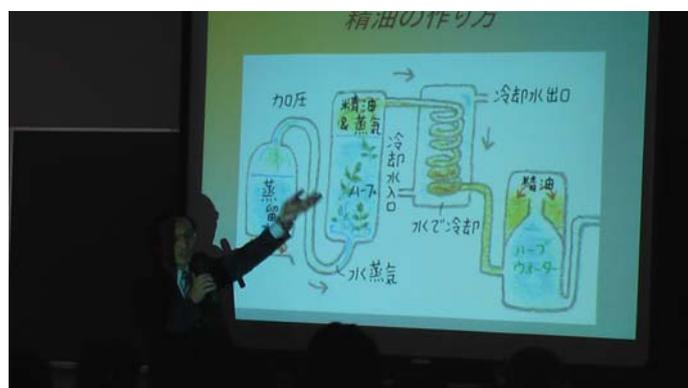


熱心に講義を聞く参加者

### ②「アロマセラピー」（あざみ祭特別企画）

平成 19 年 11 月 3 日（土）、本学の大学祭である「あざみ祭」において「アロマセラピーと健康」と題する特別企画を開催した。開催時間は 10 時から 12 時半まで。本学西館 12 号教室で開催されたこの企画には、50 名の人数制限を設けたのにたいし 42 名の参加があった。

当日の進行は、まず本学の江川幸二准教授が「アロマセラピーと健康」と題し、アロマに関する学術的な解説や実際の使用例などについて講義をおこなった。続いて、古谷久美子講師（有限会社 I・M・C）が「アロマセラピーの実際」と題して、日常生活に役立つアロマの知識について、大泉恵美講師（同）が「エゴグラムと香りの調査結果」についてそれぞれ講義を行いし、その後、参加者自身が実際にエゴグラムを用いて自分自身の性格傾向を測定し、あわせて実際に 6 種類のアロマの匂いを嗅いで自分の好む香りを確認した。最後に、事前に講習を受けた学生たちがプチセラピストとして、参加者に対してアロマハンドマッサージを行い好評を得た。



江川准教授の講義



学生によるマッサージ

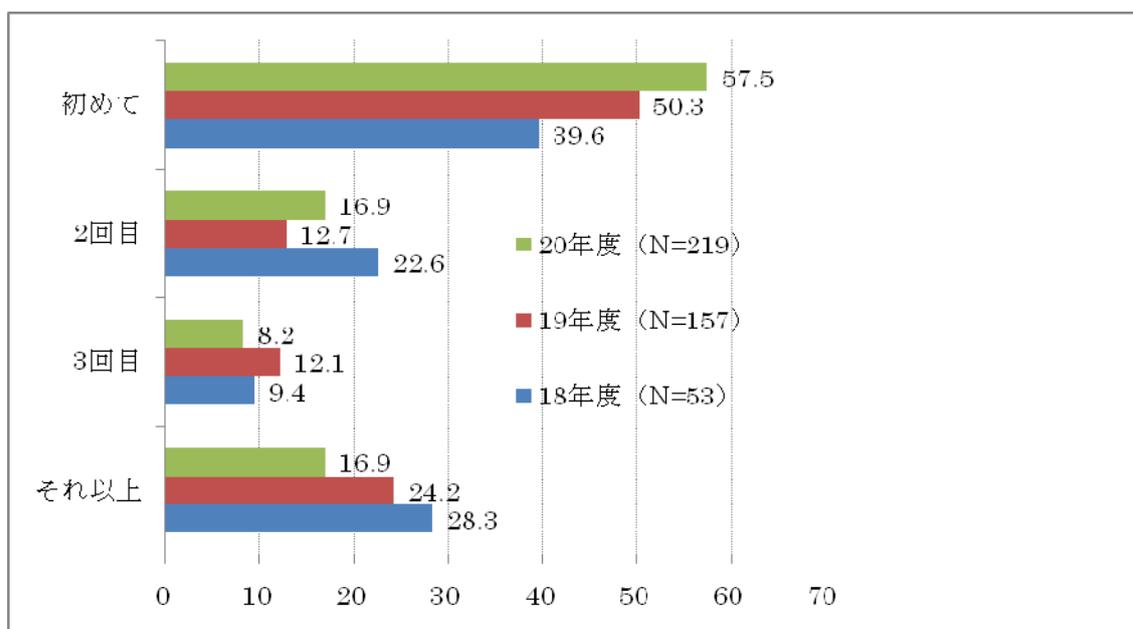
## (2) 「まちの保健室活動」の成果と課題

「まちの保健室活動」では、毎回の事業評価を行うために平成 18 年 10 月に住民と学生ボランティアを対象とするアンケート調査を実施した。ここではアンケート結果をもとに、平成 20 年 12 月までの取り組みについて考察する。

### ① 住民へのアンケート結果にみる成果と課題

#### i. 住民参加者の参加回数（図Ⅱ-4-2）

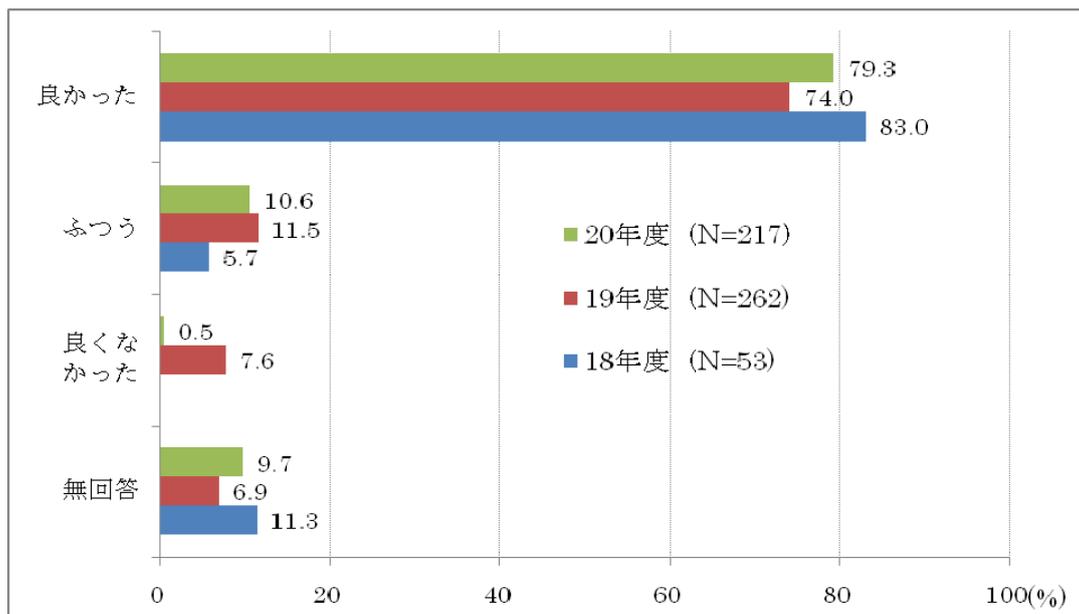
3年間を通して40～60%が初回参加、13～23%が2回目、8～12%が3回目、4回以上も16～28%となっていた。3年間の変化についてみると、平成18年度はリピーターが多い傾向がみられるが、平成19、20年度にかけては、3、4回目以上のリピーターが少しずつ減少している。この結果から、平成17年にスタートした「まちの保健室活動」は、翌18年度にかけてリピーターが増加したが、これらリピーターも3年目までは継続参加できていなかったのではないかと推察される。なお、平成19、20年度に初回参加者の割合が増加したのは、同じテーマをできるかぎり繰り返さないよう配慮した結果、新しいテーマに関心をもった初回参加者が増えたことが一因ではないかと考えられる。



図Ⅱ-4-2 「まちの保健室活動」への住民参加者の参加回数

#### ii. 「まちの保健室活動」の内容（図Ⅱ-4-3）

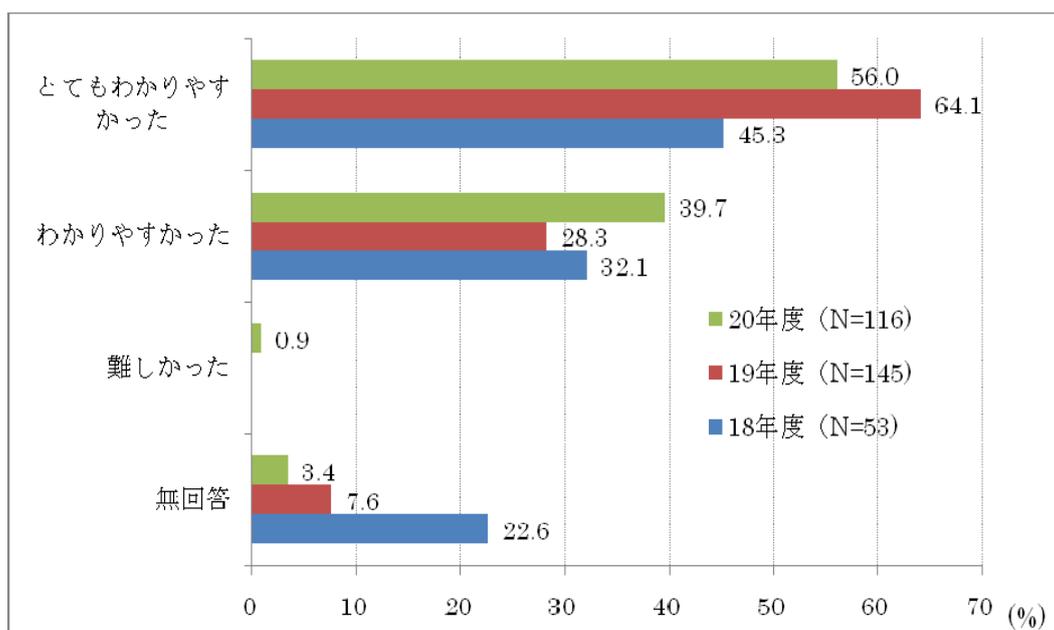
内容については「良かった」が74～83%、「普通」が6～12%、「良くなかった」は1～8%であった。3年間の変化をみると、平成18年度の評価が他の年度に比べやや高い傾向がうかがえる。全体の評価では、およそ80%以上が「普通」「良かった」と評価しており、ミニ講義のテーマや全体の構成において、健康相談や体験コーナー、健康チェックなどを組み合わせたことが効果的であったと考える。



図Ⅱ-4-3 「まちの保健室活動」の内容への参加住民の満足度

iii. 講義のわかりやすさ (図Ⅱ-4-4)

「まちの保健室活動」では、本学教員などの専門家による講義を実施してきたが、これについては「とてもわかりやすい」が45～64%、「わかりやすい」28～40%で、「難しい」はごく少数であった。3年間の変化をみると、初年度に比べ平成19、20年度で「わかりやすい」が増加している。これは、学園都市近隣の医師や各種セラピスト等の専門家を講師として依頼する際に、市民向きにわかりやすくという点を強調したことや、集中力の点から講義時間を約40分以内に限定したことが効果を上げたのではないかと考える。



図Ⅱ-4-4 「まちの保健室活動」講演の参加住民にとってのわかりやすさ

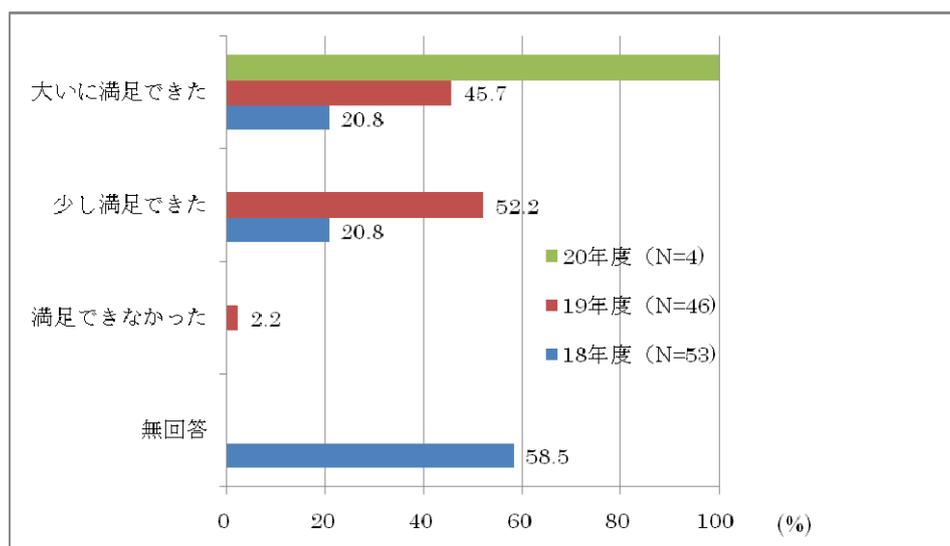
#### iv. 体験コーナーの有用性

体験コーナーは、当該テーマの講義に引き続き、実際に塩分量の測定や体力測定、ウォーキング、アロマを使ったハンドマッサージなど、体験をしてもらうことで、講義内容の理解を深めてもらうことをねらいとしていた。これについては、「大いに役立った」49～51%、「少し役立った」25～28%と概ね好評であり、これは平成 18、19 年度ともに同様の傾向であった。この結果から、体験コーナーは健康教育の方法として有効であったと考えられた。

ただし、実施に際しては、参加者数が予測できない中での物品の準備やスタッフの確保をどうするか、待ち時間をどう工夫するかなどの課題が残った。

#### v. 健康相談に対する満足度（図Ⅱ-4-5）

健康相談については、「大いに満足できた」46～100%、「少し満足できた」20～52%で平成 18・19 年度ともに「満足できなかった」はごく少数であった。健康相談は希望者のみを対象としており、リピーターは少ない傾向にあるが、骨粗しょう症や高血圧症、認知症、足の健康、歯の健康などテーマに関連して健康相談を設けた企画では、個別相談のニーズが高いことがうかがえた。今後より満足度を高めるためには、不満点や要望などについて利用者からの忌憚のない意見を積極的に得ていく必要がある。

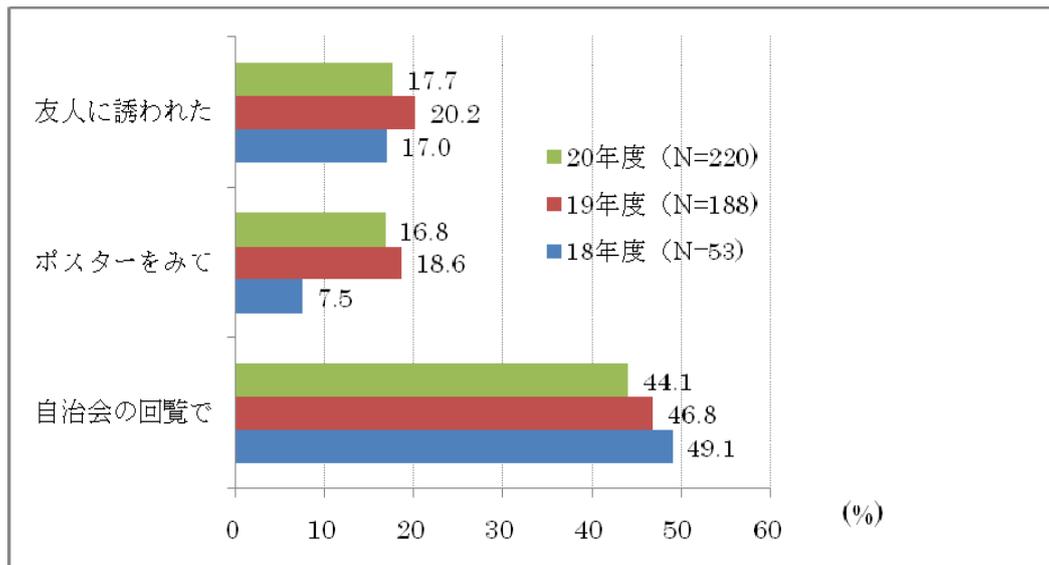


図Ⅱ-4-5 「まちの保健室活動」健康相談コーナーへの住民の満足度

#### vi. 催しに関する情報の入手先（図Ⅱ-4-6）

参加者が「まちの保健室活動」の催しをどこで知ったかについて尋ねた結果では、「自治会の回覧」が 46～49%で最も多く、「友人に誘われて」17～20%、「ポスターをみて」8～19%が続いた。なお、3 年間の変化をみると、年度を追って「ポスター」が増える傾向にあった。

これらの結果から、チラシやポスターなどの紙媒体を用いた広報活動が最も有効であり、今後も工夫を加えながら継続していくことが有効だと確認された。友人からの誘いすなわち参加者による口コミも重要であり、今後も参加者との関係を丁寧に築いていくことが新規参加者を増やすためには重要であると考えられた。



図Ⅱ-4-6 「まちの保健室活動」参加住民は催しをどこで知ったか

vii. 住民対象のアンケート結果<自由記載より抜粋>

「まちの保健室活動」の企画にはいくつかのパターンがある。内容的には、「基本的体力測定」「運動プログラム」「健康相談」「介護予防体操」「ウォーキングとフットケア」などの健康・体力の維持をめざしたもの、「認知症の理解と予防」「高齢者とうつ病」「骨粗鬆症予防」「生活習慣病」「身近な救急蘇生・AED」「歯周病予防と歯科選び」などの医療情報の提供とセルフケアの向上をめざしたものとに分けられる。方法は講義形式のものと参加者参加型プログラムに分けられ、開催場所は神戸市看護大学内で行うもの（学園祭「あざみ祭」との共催を含む）と地域出前型に分けられる。

次に、いくつかのプログラムを取り上げ、参加者の感想をもとに評価をしてみたい。以下の表Ⅱ-4-4には「介護予防体操」、表Ⅱ-4-5には「アロマセラピーと健康」、表Ⅱ-4-6には「高齢者とうつ」をテーマにしたプログラム参加者の感想をそれぞれ示した。

表Ⅱ-4-4 「介護予防体操」参加者の感想（平成18年度12月、学内での開催）

- ◆健康に対する意識が強まり、今後とも努力したいと思っています。
- ◆運動だけでなく、人間としての心の問題もとりあげて、人としてどう生き、どう老いていくかが大切かを、人々に暖かな心を寄せつつ講義して下さいましたので、共感をもって、これからも先生や看護大学の指導に従って生きたいと思います。
- ◆今日のようなお話は何度聞いてもよい。
- ◆今日初めてです。市民健診では受けられないチェックもあり、次も参加します。
- ◆生活習慣病について教えて欲しい。
- ◆今後も地域とつながった活動をして欲しい。
- ◆講義もとても参考になりました。有難うございました。

表Ⅱ-4-5 「アロマセラピーと健康」参加者の感想（平成19年11月、学園祭との共催）

- ◆ 良い香りに包まれて、講義もマッサージも楽しく気持ち良く参加させて頂きました。有難うございました。
- ◆ 大変参考になりました。日々の生活に役立てたいと思います。有難うございました。
- ◆ 楽しかったです。有難うございました。今後も参加したいと思います。
- ◆ アロマの講義もよかったし、ハンドマッサージも気持ちよかったです。
- ◆ アロマのオイルのことがよくわかりました。今までは香りを楽しむことしかしていませんでしたが、これからは、その他、日常生活にもいろいろ取り入れていきたいと思えます。有難うございました。
- ◆ 有難うございました。アロマの効果は単にファッションや趣味の分野に限られると思っていましたが、実際にいろいろな症状が緩和されると聞き、使ってみたいと思えました。
- ◆ アロマセラピーの知識をよく知ることができ、有難うございました。ボランティアの学生さん、ありがとう。
- ◆ とてもリラックスした気分になれ、とても楽しかったです。有難うございました。
- ◆ 初めての体験でよくわかりました。有難うございました。
- ◆ アロマセラピー・ハンドトリートメントがとてもよかったです。気持ちよかったです。
- ◆ 低血圧症なので、参考にしてマッサージをしたいと思えます。
- ◆ 携帯電話・メールによる「いじめ」、見えないだけに親はわからない部分が多い。それらによる不登校も多い昨今、どのように対処すればよいのか、などの講義があれば参考にしたい。
- ◆ よくチラシは自治会からいただくのですが、次から参加させていただきます。
- ◆ 地元と一体になっているのがよいと思えました。内容も良かったです。
- ◆ 香りを6種類かぎ分けるのは難しかったです。少し減らせてもらえればと思えます。
- ◆ 健康診断も時々して欲しい。
- ◆ 子どもの健康に関する講座（乳児ではなく、学童に関するもの）が少ないような気がします。

表Ⅱ-4-6 「高齢者とうつ」参加者の感想（平成20年6月、学外での開催）

- ◆ 今回はじめて参加しました。うつの話がよくわかり、よかったと思えます。
- ◆ 海外事情はなかなか興味のある内容でした。
- ◆ 今日の講座はよくわかりうれしかったです。また参加したいです。
- ◆ 50代でうつになりました。二度とかかりたくないの、生き方を精一杯かえました。
- ◆ 短い時間でしたが内容の濃い内容でした。有難うございました。
- ◆ うつの話がとてもよくわかり、有難うございました。そこそこ気をつけたいと思えます。
- ◆ 講師のうつに関する講演、とてもユーモアがあり解かりやすく勉強になりました。
- ◆ 引越しようつになり、医師に診てもらっていましたが、今日の話でよりよくわかりました。
- ◆ 引っ越しをして12年になりますので、慣れてきたのもあり、よくなりました。価値を広げようと思えました。
- ◆ うつについて初めて色々なことがわかりました。今後は、自分になっても、他人になっても、絶対治ると確信して毎日の生活を送っていきたくて考えました。
- ◆ うつの話がわかりやすかったので理解できました。海外の話もよかったです。どうも有難うございました。
- ◆ 今後もこのような講座が開かれることを期待します。

以上の感想から見えてくる参加者の反応の特徴は、第一に年度を追うに従って感想が具体的、個別的な内容になってきていることである。これは年度ごとに委員会で評価をし、次年度の企画を考案してきたことの成果ではないかと考えられる。初期には健康維持プログラムが中心であったが、参加者の希望やメンバーの工夫、開催場所を外部的にしてニーズを引き出す企画を増やしていった結果でもある。

第二に、特別企画として取り組んだ「あざみ祭との共催」は参加者も多く、感想が多く寄せられていた。これは、テーマが現在多くの関心が寄せられている「アロマ」であったこと、参加者が学生ボランティアとの交流（実際にアロママッサージを受ける）をする参加型の企画であったことが影響していると考えられた。受け身で講義を聴くだけでなく参加することにより参加者は満足感が得られ、「まちの保健室活動」への希望内容もより具体的になってきたものと考えられる。

第三に、「高齢者とうつ」をテーマにした企画では、参加者の反応はよりはっきりしている。切実な問題を抱えて参加した人の感想が散見され、本学教員の専門性を生かした企画内容が奏功したと考えられた。地域出前型として企画されたこの回は、開催場所が新興住宅地域の集会所であり、地域に潜在する健康問題に着目したテーマであったことも有効だったのではないかと考えられた。地域に出かけていく出前型の企画は準備に負担がかかるが、学内での開催ではみられない新鮮な反応が得られるのが利点である。

以上のような評価をもとに、今後の「まちの保健室」の企画内容を検討していく必要があると考える。

## ② 運営委員会メンバーの意見にみる成果と課題

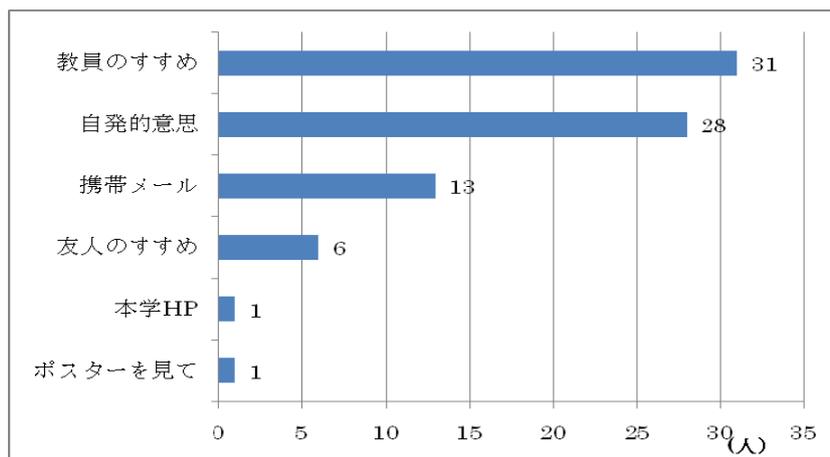
「まちの保健室活動」では、前年度の実績と運営委員会のメンバーの意見をもとに、翌年度のテーマや講師を計画した。平成 18、19 年度は体験コーナーや健康相談、血圧や体重などの測定コーナーを設けていたが、健康相談や測定に関しては毎回参加者がさほど多くないこともあり、平成 20 年度には隔月程度の回数とした。また、担当者については、平成 18、19 年度は部門リーダーが教員の年間参加回数の調整を行っていたが、平成 20 年度からは領域単位で担当するよう体制を変更した。学生ボランティアの確保については、毎回メールを通じて希望者を募り、主に当日の受付や参加者との懇談、企画コーナーの補助などの役割を担ってもらった。しかしこうしたやり方では、全体の動きが見えにくいなかで役割を果たすことに学生が戸惑い、参加者が少ない場合などは時間のすごし方に困る場合もみられた。今後は学生参加者に、もっと企画の全体に関わってもらえるような運営体制上の工夫が必要であると考えられる。

## ③ 学生ボランティアへのアンケート結果にみる成果と課題

学生ボランティアを対象に行ったアンケートの結果によると、学生が参加したきっかけは、「自発的意思」と「教員のすすめ」が同数で 29 名（48%）であった（図Ⅱ-4-7）。学生への呼びかけには、学生部門と協力し携帯メールによる登録ボランティア制度を活用した。具体的には「まちの保健室活動」の開催前月に企画の概要に関する情報を流し、学生を募集するという方法であった。アンケート結果では携帯メールがきっかけとなった者は 14

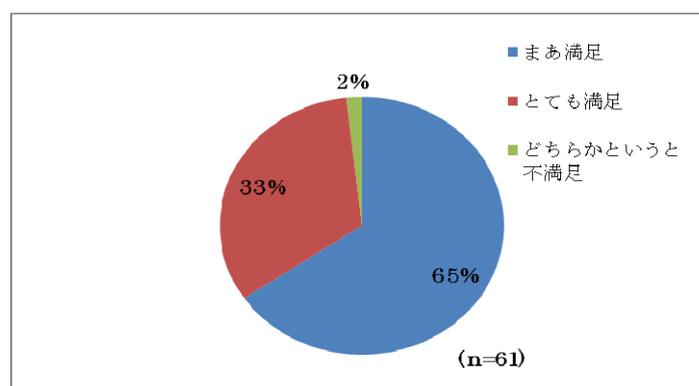
名であったが、「自発的意思」と答えた学生のなかにも携帯メールで情報を入手した学生が含まれている可能性がある。携帯メールを用いた方法は、いつでもどこでも見ることができるという利点があり、掲示板に比べ見落としがない点で便利であるため、今後も学生への情報発信の手段として活用していきたい。

「自発的意思」と同様、学生参加を促すためには「教員のすすめ」も重要であった。先の携帯メールだけでは伝えきれない内容を教員が補足し、参加を迷っている学生の背中を押すような関わりが学生の参加につながっていったものと思われた。

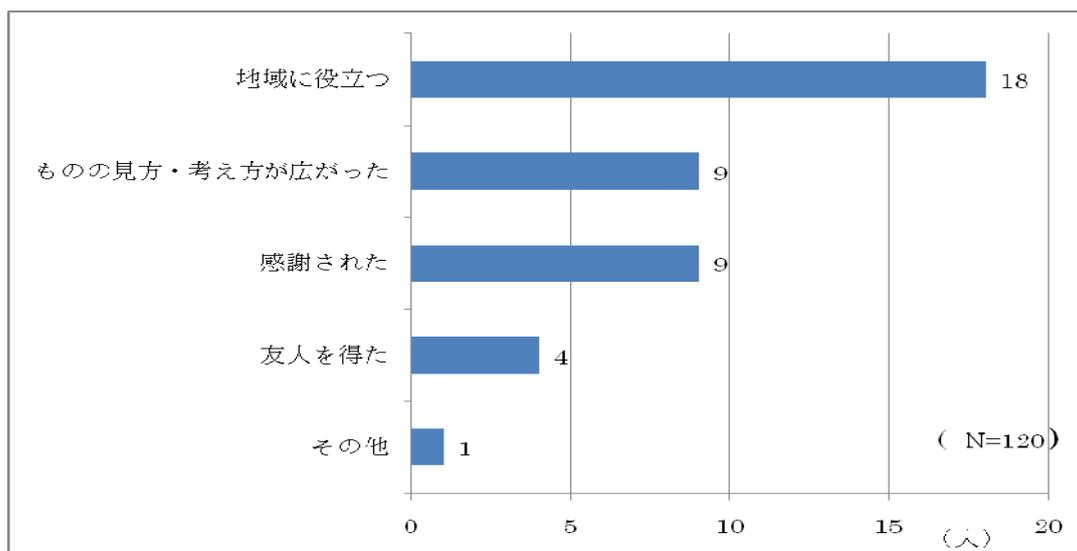


図Ⅱ-4-7 「まちの保健室活動」学生ボランティア参加のきっかけ（複数回答）

最終的に、学生の「まちの保健室活動」への参加への満足度は、「まあ満足」38名（63%）、「とても満足」19名（31%）で、大半が満足という結果であった（図Ⅱ-4-8）。満足した理由としては、「楽しかった」43名（36%）、「知識や技術が身に付いた」37名（31%）、「地域に役立つ」18名（15%）、「感謝された」「ものの考え方が広がった」が各9名（15%）、「友人を得た」4名（3%）と多岐にわたっていた（図Ⅱ-4-9）。なお平成20年度には、学生主体の企画として「アロマセラピー」「カラーセラピー」「笑い」「メイクアップ」の4つを企画し、テーマごとに集まった数名の学生にたいし、定期的に教員が動機づけや環境を整える支援を行った結果、いずれの企画においても学生は高い満足感・達成感を得たようであった。



図Ⅱ-4-8 「まちの保健室活動」参加後の学生の満足度



図Ⅱ-4-9 「まちの保健室活動」参加後の学生の満足の理由（複数回答）

以上の結果より、学生たちは「まちの保健室活動」への参加を通して、新しい知識や技術を得ることができたほか、地域住民や学生との間でのさまざまな交流を体験できたことが明らかになった。また、企画や運営を学生に任せることも学生の学びを深める点で重要であると考えられた。今後「まちの保健室活動」をとおしての学生の学びをさらに深めていくためには、参加した学生の体験や学びを参加できなかった学生と共有できるような機会を設けたり、学生主体の企画を最低でも年に1回は開催することなどを課題としていきたいと考える。

なお、学生主体の企画にたいしては、適切なリーダーシップを取れる教員の支援が不可欠である。そのためには、担当する教員だけでなく教員全体での共通理解と相互協力が重要でもある。また、学生のボランティア活動を支援するための体制作りとして、今後は既存のボランティア科目（選択科目「ボランティア活動」）やサークル活動（「ボランティア部」）との連携を工夫し、学生ボランティア間での情報共有を促進できるような体制づくりもおこなっていきたい。

### 3) 「子育て支援活動」の実績と成果

まちの保健室においては平成18年度から、地域における育児支援の場を提供するための取り組みとして「子育て支援活動」を継続的に実施してきた。本学の「子育て支援活動」の目的は次の2点であった。

第1点は、地域の子どもの安らかな発達の促進と育児不安の軽減をめざすことである。具体的には「健康相談を行なう」とことと「他の家族（母親）との交流がはかれる機会を提供する」とことである。第2点は、将来的に、本学学生が地域における子育て支援の技術を学べる場とすることであり、現段階ではボランティア活動を通じて、学生が「他者・社会・自己」を知り、援助者としての基盤作りができることである。

以下では、平成 18～20 年度の 3 年間の「子育て支援活動」の実績を振り返り、今後の課題を検討する。

(1)「子育て支援活動」の実績

①開催実績と参加者の概要

「子育て支援活動」は、平成 20 年 12 月までに全 15 回、年間 6 回開催してきた（表 II-4-7）。初回の参加者は 6 名と少なかったが、以後回数を追って増加していき、平成 20 年の参加者数は毎回ほぼ 20～30 名程度に落ち着いてきている。参加者（母親）の年齢や家族形態などは、以下の図 II-4-10、表 II-4-8、表 II-4-9 に示した。

表 II-4-9 平成 18～20 年度「子育て支援活動」の開催実績（n=328）

	内容		参加人数
第 1 回	健康相談	平成 18 年 5 月 11 日	6
第 2 回	健康相談	平成 18 年 6 月 8 日	20
第 3 回	健康相談	平成 18 年 10 月 12 日	13
第 4 回	健康相談	平成 18 年 12 月 14 日	15
第 5 回	健康相談	平成 19 年 2 月 8 日	17
第 6 回	健康相談	平成 19 年 3 月 8 日	26
第 7 回	健康相談	平成 19 年 5 月 10 日	20
第 8 回	健康相談	平成 19 年 6 月 14 日	20
第 9 回	健康相談	平成 19 年 10 月 11 日	26
第 10 回	健康相談	平成 19 年 12 月 13 日	19
第 11 回	健康相談	平成 20 年 2 月 14 日	33
第 12 回	健康相談	平成 20 年 3 月 13 日	33
第 13 回	健康相談	平成 20 年 5 月 8 日	23
第 14 回	健康相談	平成 20 年 6 月 12 日	28
第 15 回	健康相談	平成 20 年 10 月 16 日	29

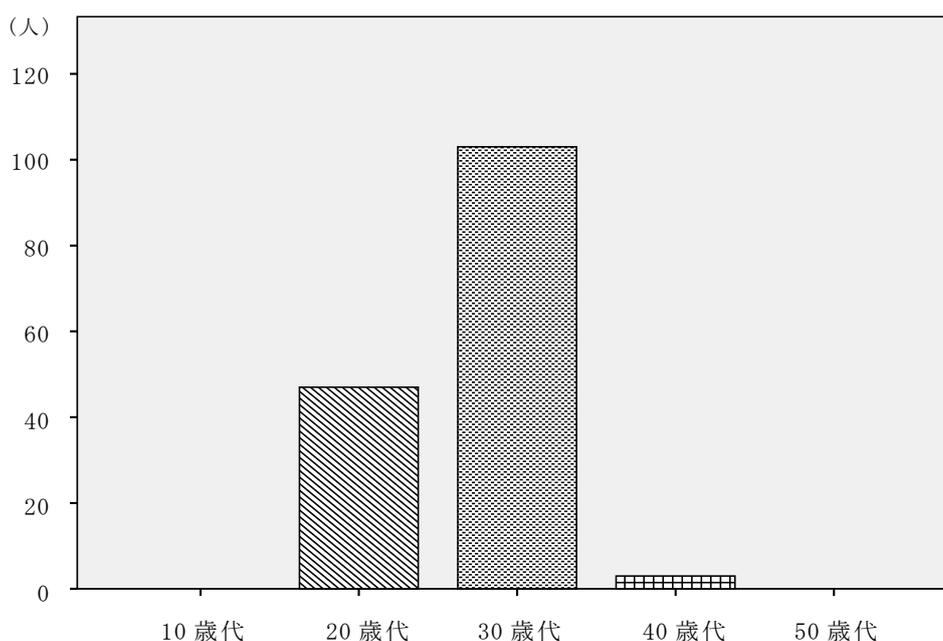


図 II-4-10 「子育て支援活動」に参加した母親の年代

表Ⅱ-4-8 「子育て支援活動」参加者の家族形態

	n=163	(%)
核家族	156	(95.7)
拡大家族	6	(3.7)
無回答	1	(0.6)

表Ⅱ-4-9 「子育て支援活動」参加者の子どもの出生順位

	n=163	(%)
第1子	140	(85.9)
第2子	20	(12.3)
第3子	2	(1.2)
無回答	1	(0.6)

②広報・準備などのスケジュール

各回「子育て支援活動」の開催2～3週間前から、ボランティアの募集や広報を開始し、2～3日前には当日の具体的な準備作業を開始した。「子育て支援活動」の全体のスケジュールを表Ⅱ-4-10に示した。また、「子育て支援活動」の広報用チラシの例を資料Ⅱ-4-2に示した。

表Ⅱ-4-10 「子育て支援活動」のスケジュール

時期	内 容
2～3週間前	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 開催日時等のデータを入力したファイル（ホームページ掲載用とチラシ用）を作成し、担当者（事務局）へ送付する。</li> <li>② チラシ（ピンク色、B5サイズ）を540枚印刷し、担当者（事務局）に手渡す。</li> <li>③ 学生ボランティア・メーリングリストを利用し、学生ボランティアの募集を行う。同時に、教員が、担当のゼミ学生や担当講義の受講学生への声かけも行う。</li> </ol>
2～3日前	<ol style="list-style-type: none"> <li>① まちの保健室の活動要領に、開催日と参加教員、ボランティア学生の氏名を入力して、印刷・配布する。（学生ボランティアには当日配布）</li> <li>② 参加教員、学生ボランティアの名札をつくる。</li> <li>③ 次回「まちの保健室」のポスターを準備する。→当日会場に貼る。</li> <li>④ 「子育て支援会場までの案内（ベビーカー置き場、会場までの道順の矢印などの用紙）」を準備する。</li> <li>⑤ 「学生ボランティアへのアンケート」用紙を準備する。</li> <li>⑥ 当日、参加者に配るお茶（ペットボトル）を準備する。（期限や数量を確認する。おおよその参加人数を考えて、早めに担当者（事務局）を通して注文しておく。）</li> </ol>
当日	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 「子育てひろば」の看板を正門に設置する。</li> <li>② 子育て支援の要項に沿って準備をする。</li> </ol>
当日終了後	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 学生ボランティアにアンケート用紙を配布し、回収する。回収したアンケートは、後日、担当の教員が集計する。</li> <li>② 参加した学生ボランティア数の集計を行う。</li> <li>③ 参加者の相談等の集計を行なう。</li> <li>④ 次回分の参加者カルテ（用紙）がなければ補充し、次回計測分の「身長・体重」のスタンプを押しておく。初回参加者のカルテ（ファイル）を作成しておく。</li> </ol>

現代GP企画

## 神戸市看護大学 まちの保健室

### 子育て支援（すこやかクラブ）

神戸市看護大学まちの保健室子育て支援（すこやかクラブ）は、お母さん、お父さん方が日頃子育てしているなかで感じたことを相談できる場所です。いろいろなこととお話しませんか。  
お子さんと一緒に遊びにきてくださいね。

★日 時：14:00～16:00

平成19年5月10日（木）	平成19年12月13日（木）
平成19年6月14日（木）	平成20年2月14日（木）
平成19年10月11日（木）	平成20年3月13日（木）

★場 所：神戸市看護大学 北館1階  
★内 容：身長・体重測定、育児相談

費用は無料です。  
お気軽にお越しくださいね。

●お問い合わせ先●  
神戸市看護大学まちの保健室子育て支援  
神戸市看護大学小児看護学  
Tel：078-794-8066

現代GP企画

## 神戸市看護大学 まちの保健室

### すこやかクラブ

神戸市看護大学まちの保健室子育て支援「すこやかクラブ」は、お母さん、お父さん方が日頃子育てしているなかで感じたことを相談できる場所です。いろいろなこととお話しませんか。  
お子さんと一緒に遊びにきてくださいね。

★日 時：3月8日（木）14:00～16:00  
★場 所：神戸市看護大学 北館1階  
実習室1（保健看護系）  
★内 容：身長・体重測定、育児相談

費用は無料です。  
お気軽にお越しくださいね。

●お問い合わせ先●  
神戸市看護大学まちの保健室すこやかクラブ  
神戸市看護大学母子看護学講座小児看護学  
Tel：078-794-8066

資料Ⅱ-4-2 「子育て支援活動」 広報用チラシ

③開催当日の活動の実際

開催当日は、小児看護学分野の教員 4 名、学生ボランティア 2～4 名、地域（住民）ボランティア 2 名で運営した。主たる役割は下表（表Ⅱ-4-11）のとおりであった。

表Ⅱ-4-11 教員・学生ボランティアの役割

	役 割
教員 4 名 (小児看護学分野)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・メンバーの総括</li> <li>・開催企画・準備</li> <li>・健康相談</li> <li>・子どもの身体計測</li> <li>・集計</li> <li>・片付け</li> <li>・会計</li> </ul>
学生ボランティア 2～4 名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受付・案内</li> <li>・子どもの身体計測補助</li> <li>・環境調整</li> <li>・子どもと遊ぶことで、母親と教員との健康相談、あるいは母親同士の交流が促進されるようにする。</li> <li>・子どもの危険防止（転倒・外傷・小さい玩具の誤嚥など）</li> <li>・午睡中の子どもの掛け物調整</li> <li>・室温調整</li> </ul>
地域ボランティア 2 名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生ボランティアの役割に準ずるが、子どもとの遊び方・関わり方について、母親に対するロールモデルになってもらう。</li> </ul>

#### ④設備・物品等の準備

当日は次のような設備・物品等を準備した。また、会場の配置図は図Ⅱ-4-11に示した。

【事務用品】ボールペン、クリップボード、記録用紙（カルテ）、ファイル、パンフレット、  
印鑑（まちの保健室印、身長・体重印）

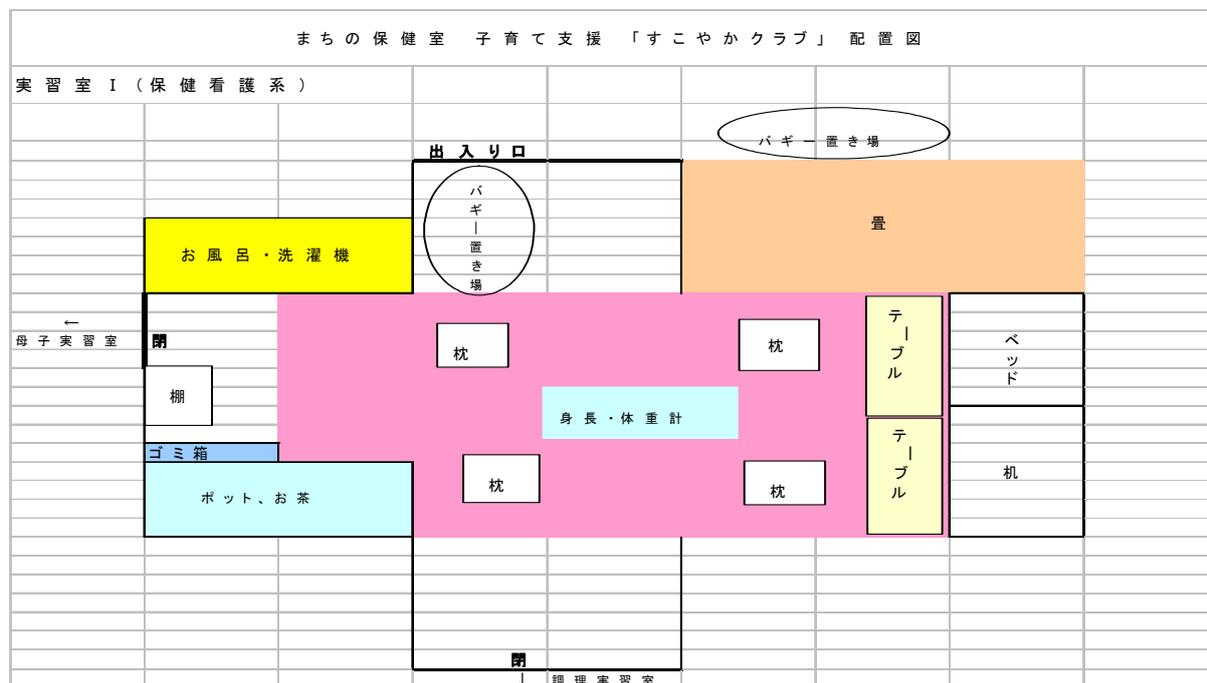
【計測用具】身長計、体重計、メジャー

【子どものもの】絵本、おもちゃ、調乳ポット、オムツ捨てバケツ、ビニール袋

【設備】机、保育マット、座布団、バスタオル、ティッシュ、オシリ拭き、紙おむつ

【その他】エプロン、名札（宛名ラベルで作成）

案内用のチラシ（会場までの案内、バギー置き場、トイレ、貴重品について）



図Ⅱ-4-11 会場の配置図（子育て支援「すこやかクラブ」）

#### ⑤身体計測・健康相談の実際

身体計測および健康相談は、小児看護学分野教員により、次の要領で行った。

- i. 親子が来られたら、親子の氏名・住所など、記録用紙（カルテ）の一般事項について聴取する。
- ii. 座布団の上に寝かしてもらい、裸にして身長・体重を計測し、計測結果を記録用紙（カルテ）と母子手帳に記入する。
- iii. 子どもに服を着せた後、母親が記入した記録用紙（カルテ）の事項（相談したい内容）に基づいて健康相談を行なう。相談内容を記録用紙（カルテ）に記録する。
- iv. 適宜、他の親子と触れ合ったりするなど交流をすすめる。
- v. 次回のまちの保健室の日を案内する。
- vi. 終了後、1日の集計をとる。



身体計測



健康相談

## (2)「子育て支援活動」の成果と課題

### ①参加者アンケートによる中間評価と方針確認

「子育て支援」活動の実施に際しては、前述したように、「地域の子どもの安らかな発達の促進と育児不安の軽減をめざす」ことを目指して、具体的には「健康相談の実施」と「他の家族（母親）との交流がはかれる機会を提供する」ことに努めた。そして、これらの運営方針が参加者のニーズに則しているかを確認するため、第5回開催時点（平成19年2月）に、参加者にアンケート調査を実施した。アンケートの主な項目は、「参加動機」「健康相談が育児に役に立つか」「参加した満足度」「今後の運営に望むこと」の4点である。

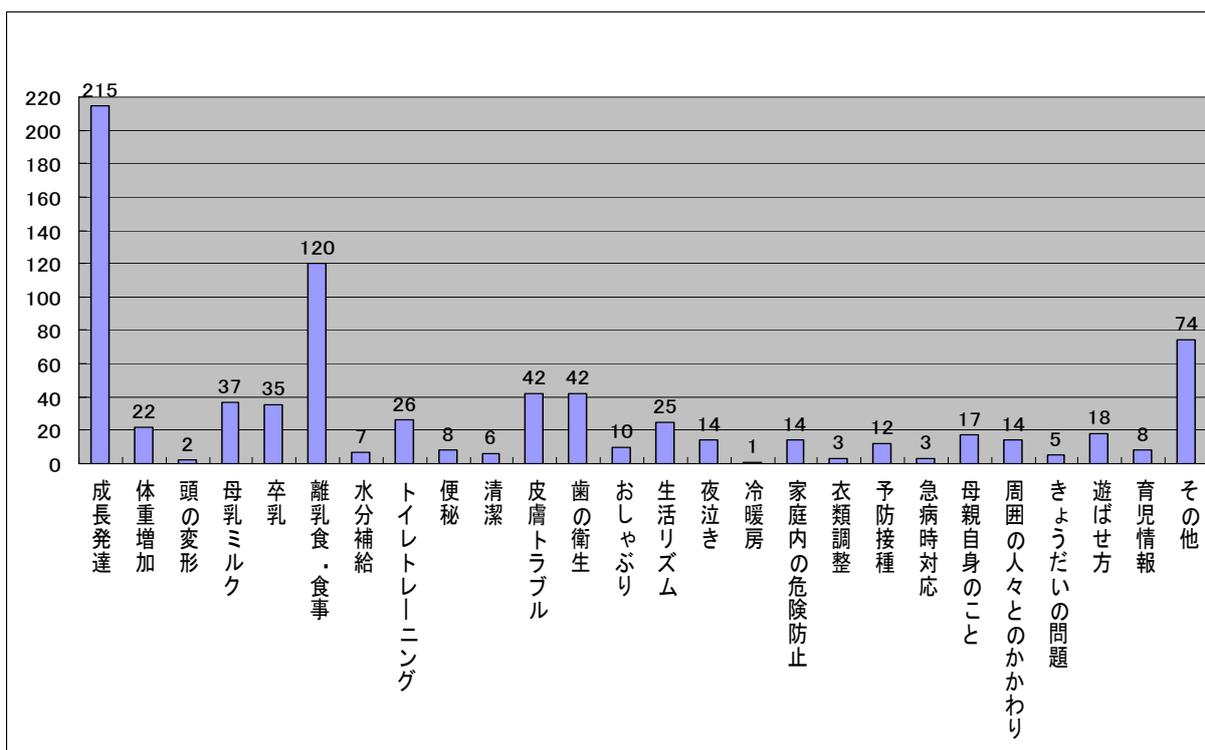
調査の結果、「健康相談が育児に役に立ったか」と「参加の満足度」については半数以上が肯定的な回答であった。また、参加動機では、半数近くの母親が他の母親との交流を目的として来場していると回答しており、他には「子どもの身長・体重を測定して発育評価をしてくれるから参加する」という自由記述もみられた。「今後の運営に望むこと」においても、「他の母親との交流」と回答した母親が半数以上で最も多かった。

以上から、当初からの方針を継続して運営していくことが、参加者のニーズに応えることになると考え、第6回開催以降から現在まで、「健康相談の実施」と「他の家族（母親）との交流がはかれる機会を提供する」の2点を主な活動とした。

### ②参加者の属性からみた成果と課題

前掲表Ⅱ-4-6に示したように、「子育て支援活動」への参加者は、1回は6名と少なかったものの、広報の方法を改善した第2回目からは来場者も増え、おおむね毎回盛況で、15回目までの平均参加者数は21.9組(SD7.52)であった。

参加した母親の平均年齢は31.7歳(SD4.0)で、年代は30～20代が92%(前掲図Ⅱ-4-10)、家族形態は核家族95.7%(前掲表Ⅱ-4-4)、参加した子どもは第1子が85.9%(前掲表Ⅱ-4-5)、平均月齢14.9ヶ月(SD10.6)であった。また、相談内容は図Ⅱ-4-12に示したが、「成長発達」以外で多かったのは、離乳食の内容・量・食べさせ方などに関する「離乳食・食事」が120件(15.4%)、湿疹やアトピー性皮膚炎の管理に関する「皮膚トラブル」42件(5.4%)、歯磨きを嫌がる際の対応や磨き方・歯ブラシの選び方に関する「歯の衛生」が42件(5.4%)であった。



※『成長発達』は、子どもが怖がったり、母親が測定不要と言われた場合以外の参加者へ、身長・体重計測と発育評価を実施した件数（215件（27.6%））である。

※『その他』74件（9.5%）の内訳は、「言葉の遅れ」8件、「子どもの問題行動」6件、「人見知り」「子どもの体の特徴について」「発達障がいの可能性」「発達の遅れ」がそれぞれ4件、「しつけ」3件、「退行」「外出の仕方」「分離不安が強いこと」「服薬の仕方」「職場復帰対策」「母親の持病」等。

図Ⅱ-4-12 「子育て支援活動」全体の相談内容と件数

現代の子育て不安の背景には、地域や家庭における教育力の低下があり、それらをもたらした要因としては「核家族の進行」「少子化」「就労女性の増加・高学歴化」などがあるといわれている。前述のデータからは、参加者が在住する西区においても同様の傾向のあることがうかがえる。

以上から、西区においては、多くの住民が子育てに関する専門家からの助言や、子育て者同士の交流を求めていることが十分うかがえる。今後もこの取り組みを継続し、子育て中の多様なニーズに応える育児支援の機会を保障することが重要であると考えた。

### ③健康相談の内容からみた成果と課題

参加者の相談内容については、「離乳食・食事」「皮膚トラブル」「歯の衛生」の件数が多かった。このことは、各種の研究成果において、食事（食事内容・偏食など）、皮膚（湿疹・アトピー性皮膚炎など）に関する相談は月・年齢がすすんでも継続すると報告されていることとも一致しており、今後もこれらに関する知識や技術を、子どもの月・年齢に応じて丁寧に助言していく必要性が示唆された。

さらに、子どもの身体的な問題に関する相談は7ヶ月から1才6ヶ月段階で有意に減少

し、発達上の問題と情緒・社会性に関する相談は1才6ヶ月から3歳で有意に増加するという先行研究の結果もある。今後、参加者の育児に関する多様なニーズに応じていくためには、健康相談内容と子どもの月・年齢との関連をさらに検討し、子どもの発達段階によって異なる相談内容への助言や指導をいっそう充実させていくことが必要であると考えられた。

#### ④参加者の状況にみる成果と課題

健康相談を実施する中では、「子どもへの関わり方がマニュアル的である」「育児書などから得た知識をもとにした客観的な正確さにこだわる」「子どものマイナス面しか話さない」「育児への自信がない」「育児を相談できる相手が夫以外にいない」といった参加者の反応や状況が気になった。これは、参加者のほとんどが子育て世代である20～30代であり、その多くが地域で幼い子どもと関わったり、遊んだりした経験が少ない少子化世代であることが影響していると考えられた。

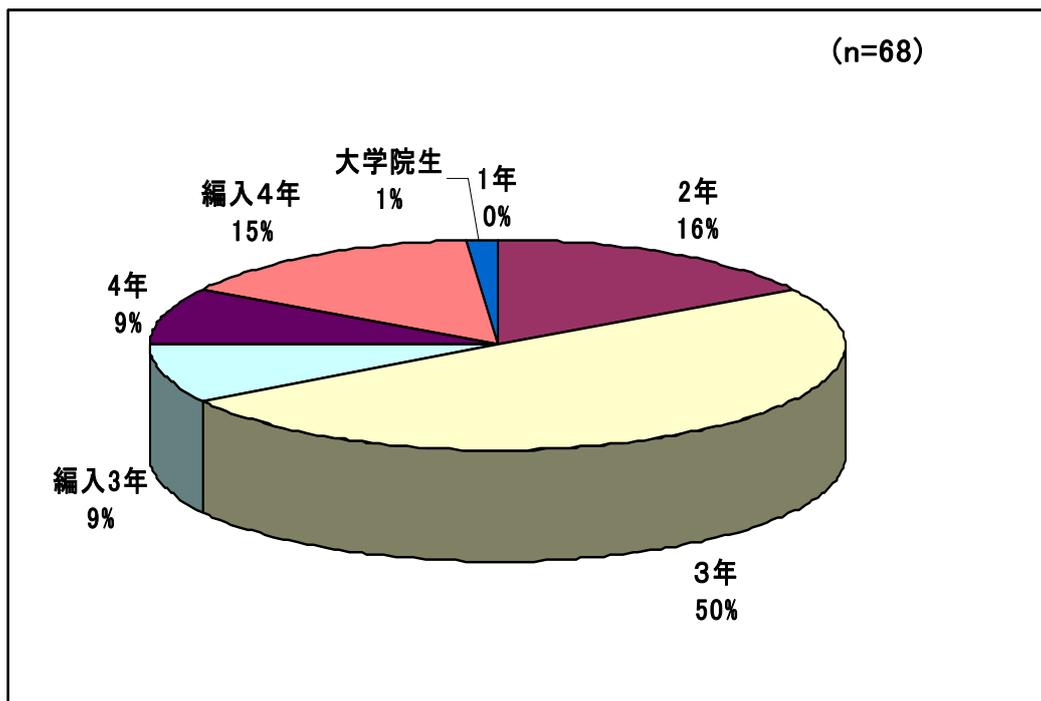
そこで、参加者に対する支援においては、子どもにはその子どもの個性があり、育児書はあくまでも目安にすぎないことを説明したうえで知識提供や、母親の子どもへの関わりや日々の努力を認め、支持する姿勢を心がけた。また、参加者に核家族世帯が多く、乳幼児を養育する他の家族との交流や子どもの養育者（母親）に対する育児サポートが十分ではないことも考えられたため、前述のアンケート調査の結果もふまえて、同じ月齢の子どもをもつ母親同士の交流を促進するような支援を実施した。具体的には、学生ボランティアが子どもの遊び相手をして母親同士が安心して交流できるよう配慮したり、教員や地域ボランティアが母親同士の会話のきっかけとなるような話題提供をおこなうなどである。

その結果、参加者からは「子どもが動き回るので児童館などでは他の母親と交流できない。けれども、ここは子どもをボランティアがみってくれるので他の母親と交流しやすい」といった感想が聞かれ、「子育て支援活動」開始から1年後には、教員やボランティアのファシリテートが無くても母親同士で話がはずみ、育児上の悩みや不安を語りあったり、アドバイスし合ったりする姿がみられるようになった。

このように「子育て支援活動」は、単に育児に関する知識を習得するだけではなく、母親同士の交流を促進する機会を保障したという点で、一定の効果をあげたと考えられる。今後は健康相談だけではなく、子育てに関する様々な講演等の実施や参加者の相互交流を一層深めるためのピアサポートグループ形成への支援、さらに、子育て経験のある高齢者などから母親に向けた子育ての伝承ができるような機会を提供することも必要だと考える。このような今後の取り組みについてもこれまで同様、地域住民のニーズを十分確認するとともに、現代GP終了後の大学における運営体制やマンパワー、資金などの確保を検討しながら着実に進めていきたいと考える。

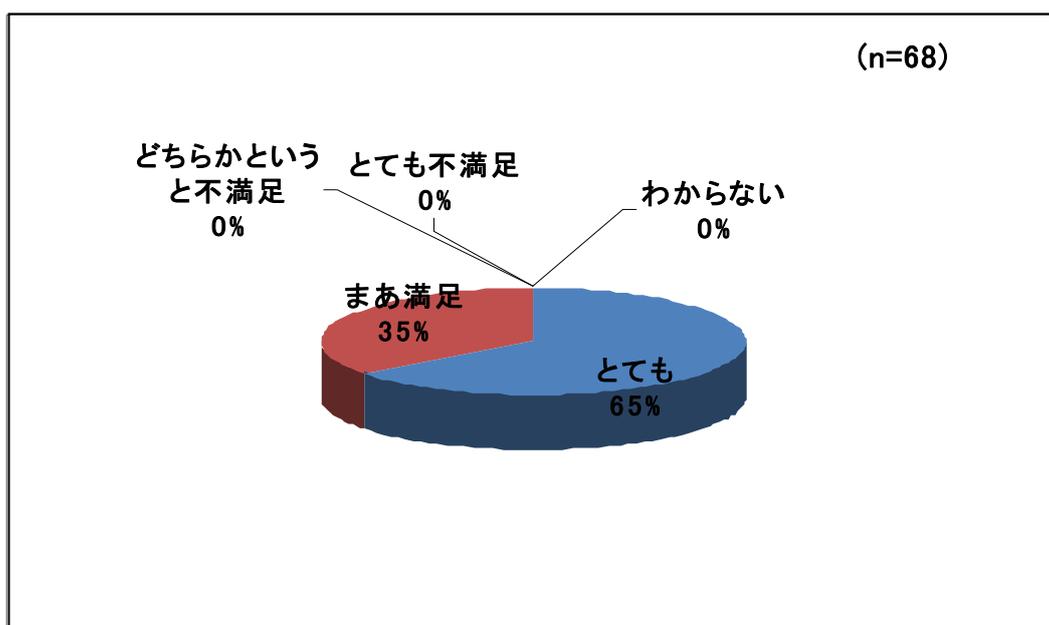
#### ⑤ 学生ボランティアへのアンケート結果にみる成果と課題

「子育て支援活動」が、学生の学びにどのような成果をもたらしたかをみるために、学生ボランティア対象のアンケート調査をおこなった。回答者68名の内訳は、3年生が半数、次いで2年生、編入4年生であった（図Ⅱ-4-13）。



図Ⅱ-4-13 「子育て支援活動」参加学生の学年別割合

アンケート結果によると学生の満足度は、「とても満足」と「まあ満足」で合計100%であった（図Ⅱ-4-14）。その理由については、ほとんどの学生が「楽しかったから」と回答しており、「ものの見方が広がったから」「知識や技能が身についたから」も約3割と、経験に学ぶ良い機会であったことがうかがわれた（表Ⅱ-4-12）。



図Ⅱ-4-14 「子育て支援活動」参加学生の満足度

表Ⅱ-4-12「子育て支援活動」学生きの「とても満足」「まあ満足」の理由（複数回答）

理 由	あてはまる		あてはまらない	
	人数	割合	人数	割合
楽しかったから	66人	97%	2人	3%
人のために役に立ったから	13人	19%	55人	81%
ものの見方が広がったから	19人	28%	49人	72%
知識や技能が身についたから	17人	25%	51人	75%

このように、子育て支援活動への学生ボランティアの参加は、次世代を担う若い学生たちが子育てを学ぶ良い機会となったと考えてよいだろう。

ただし「人のために役に立った」「ものの見方が広がった」「知識や技能が身についた」と回答した学生の割合が半数以下となっていることから、学生にとってさらに学習効果が高く、かつ学生自身が主体的に参加できるような企画を今後検討する必要もあると思われる。また、他の取り組みと同様、「子育て支援活動」についても、講義や実習などとの兼ね合いから、学生の参加機会が十分保障されたとはいえない面もある。

今後は、開催時期の工夫や本学の正規科目である「ボランティア活動」などとの連動も含め、学生の参加機会を一層保障するための方策を検討する必要があると考える。そして将来的には、学部学生の正規の演習の場として活用したり、大学院生や教員の小児看護技術の向上や研究のフィールドとしても活用できるようにし、地域住民に支援を提供するだけでなく教育・研究の場としても有効に活用していきたいと考える。

#### 4) 「こころと身体の見守り相談」の実績と成果

##### (1) 「こころと身体の見守り相談」の概要

「こころと身体の見守り相談」は、まちの保健室の一環として2007年6月21日より開始された。開催頻度は原則として月1回、時間は午後1時30分より4時40分とし、相談時間は1人当たり40分である。相談の実施者は精神看護学の教員3名で、主に2名が相談にのり、他の1名は受付をおこなった。場所は、地域住民がアクセスしやすい学園都市駅徒歩1分の大学共用施設ユニティで、相談は予約制とし、月、水、金の13時～14時に大学の事務局に電話をするか、相談日に次回の予約をとるという2つの方法とした。また、看護相談の広報は、自治会を通じた掲示板へのポスター掲示あるいは回覧板の巡回といった方法に加え、大学やユニティのホームページにも案内を掲載した。

##### (2) 「こころと身体の見守り相談」の実績

次に「こころと身体の見守り相談」の活動実績について以下に述べる。

###### ① 相談件数、利用人数等

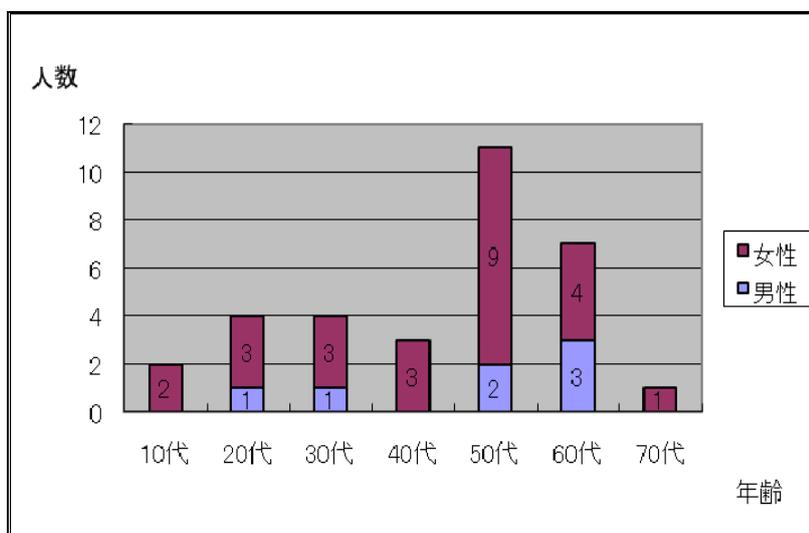
開催回数は、2007年6月21日～2008年11月5日の期間内で16回、1回あたりの相談件数は3～7件で平均は4.7件、延べ件数は75件であった。また利用人数は、家族同伴で来所する人もいるため1回当たり4～8人、平均5.5人で延べ88人に上った(表Ⅱ-4-13)。利用回数は1回が最も多く17件、次いで2回が6件と続いている。また6回以上継続して利用している人も4名いる(表Ⅱ-4-14)。

表Ⅱ-4-13 「こころと身体の看護相談」実施状況

回数	月日	件数	利用人数	男性	女性	65歳未満	65歳以上	新規	継続
1	2007年6月21日	5	6	1	5	6	0	6	0
2	2008年7月13日	5	5	1	4	5	0	3	2
3	2007年8月23日	4	4	0	4	3	1	4	0
4	2007年9月27日	6	7	0	7	6	1	4	3
5	2007年10月18日	7	7	0	7	5	2	4	3
6	2007年11月15日	5	5	1	4	5	0	3	2
7	2007年12月23日	6	7	3	4	5	2	2	5
8	2008年1月24日	4	5	3	2	5	0	1	4
9	2008年3月19日	3	4	1	3	4	0	0	4
10	2008年4月30日	4	4	1	3	2	2	0	4
11	2008年6月13日	3	4	2	2	3	1	0	4
12	2008年7月11日	4	5	2	3	5	0	1	4
13	2008年8月8日	4	5	1	4	5	0	1	4
14	2008年9月22日	3	4	1	3	3	1	1	3
15	2008年10月15日	6	8	2	6	6	2	1	7
16	2008年11月5日	6	8	2	6	5	3	1	7
合計		75	88	21	67	73	15	32	56

表Ⅱ-4-14 利用回数

利用回数	人数
1回	17
2回	6
3回	1
4回	3
5回	1
6回以上	4
合計	32



図Ⅱ-4-15 利用者の年齢区分

## ② 利用者の概要

利用者の実人数は32人、男性7名、女性25名である。年齢は17歳～72歳の範囲で、年齢分布をみると50歳代が最も多く、次いで60歳代であった（図Ⅱ-4-15）。利用者のうち家族同伴で利用した人は4組、利用者の居住地は学園都市が23名、その他の地区が3名、不明が6名である。相談者の大半は居住地の掲示板や回覧板をみて来た人であったが、学園都市に住む友人から聞いて利用する人もいた。

### ③主な相談内容と利用者の反応

相談内容が多かったのは、ストレスやうつなど精神的な辛さ、次いで人間関係の悩みなどであった（表Ⅱ-4-15）。

また、家族の心理状態や精神症状などについて心配して相談に来る人もおり、そのうち約半数は初回あるいは後日に本人同伴で来所した。

利用者の反応をみると、1回あるいは数回の利用で心配やストレスが軽減し終結に至ったケース、必要な情報が得られて納得して帰るケース、話をすることで楽になり継続して利用しているケースなどさまざまであった。

#### (3)「こころと身体の看護相談」の成果と今後の課題

約1年半、計16回にわたって実施してきた「こころと身体の看護相談」は、平均5～6名の利用があり、新規利用者もほぼ毎月加わった。また、利用者の反応も概ね良好であることから、徐々に地域に存在が認められ、地域住民のこころの健康回復の一助になっているものと思われ、今後も大学の地域貢献の一環として続けていく予定である。

なお、「こころと身体の看護相談」はその内容の専門性・特殊性ゆえ、学部学生に参加してもらうことはできなかった。今後は、大学院生や教員などの学習の場として活用していくことも検討していきたい。

表Ⅱ-4-15 主な相談内容  
(重複あり)

相談内容	件数
心理・精神	21
身体	3
人間関係	11
家族についての相談	8
情報提供希望	3
その他	1